



発行元：NPO 法人東アジア政経アカデミー

発行元連絡先：〒168-0082 東京都杉並区久我山 4-38-14 電話：03-3332-8481 FAX：03-3332-8433

URL：http://www.eapea.sakura.ne.jp/ e-mail：shnagano@d8.dion.ne.jp

## この号の内容

### 1 活動報告

(永野慎一郎)

### 2 会員からの便り①

- ヤンゴンの中で日本を感じる  
(薄葉威士)

### 3 会員からの便り②

- 韓国での弥次喜多道中顛末記 1508  
(佐々木憲文)

### 4 会員の活動

- 活動内容と展示会スケジュール  
(河正雄)
- 若松兎三郎遺跡地訪問記  
(高須俊明)
- 編集後記

## 活動報告



『綿の花とその日本人 ～外交官若松兎三郎の韓国 26 年』出版記念会

### ◇ 第 8 回日韓政策フォーラム

東アジア政経アカデミー、早稲田大学韓国学研究所、韓国統一研究院共同主催の第 8 回日韓政策フォーラムが 2015 年 7 月 3 日、早稲田大学 19 号館で開催された。テーマ：「北朝鮮・金正恩体制の現状と展望」。永野慎一郎代表は、第 2 セッションの司会を務めた。

### ◇ 第 9 回日韓政策フォーラム

東アジア政経アカデミー、早稲田大学韓国学研究所、韓国統一研究院共同主催の第 9 回日韓政策フォーラムが 2015 年 12 月 7 日、早稲田大学で開催された。テーマ：「最近の朝鮮半島情勢と日韓の対北朝鮮政策」。永野慎一郎代表は、第 2 セッションの司会を務めた。

### ◇ NPO 法人日韓トンネル研究会で講演

永野慎一郎代表は、2015 年 6 月 16 日、アルカディア市ヶ谷私学会館で開催された NPO 法人日韓トンネル研究会通常総会で、「21 世紀における東アジアの秩序と日韓関係」と題して、記念講演を行った。

### ◇ NPO 法人アジア近代化研究所で講演

永野慎一郎代表は、2015 年 9 月 12 日、日本プレスセンター小会議室で行われた NPO 法人アジア近代化研究所主催講演会で「韓国の政治文化の課題と展望」と題して講演した。

### ◇ 『綿の花とその日本人 ～外交官若松兎三郎の韓国 26 年』出版記念会出席

永野慎一郎代表は、2015 年 10 月 12 日、ソウルプレスセンター会議室で行われた『綿の花とその日本人 ～外交官若松兎三郎の韓国 26 年』（金忠植著）出版記念会に出席した。日本から若松と同郷の衛藤征士郎衆議院議員や若松の遺族など 10 余名が出席。韓国を代表する政治家、マスコミ関係者、学者など有識者 150 余名が出席した。韓国側を代表して羅鍾一元駐日韓国大使と日本側を代表して衛藤征士郎衆議院議員が祝辞を述べた。出席した若松兎三郎の孫たちが紹介され、盛大な拍手を受けた。

### ◇ 若松兎三郎遺跡地訪問

出版記念会に出席した衛藤征士郎議員と若松家の遺族たちは若松兎三郎の所縁の地である木浦を訪問した。朴洪律木浦市長と金榮善全羅南道副知事が歓迎会を開いてくれた。訪問団は木浦市関係者の案内で陸地綿発祥地の陸地綿試作記念碑や綿花畑を視察した。そして若松兎三郎が勤務していた旧日本領事館や近代歴史館を観覧した。

## 会員からの便り①

### ヤンゴンの中で日本を感じる

公益社団法人 中央日韓協会理事 薄葉 威士

今年の2月の初め、真冬の東京から乾期真っ盛りのミャンマー・ヤンゴンに行った。日中の野外は35,6度で、とにかく暑い。その中でMAJA(ミャンマー元日本留学生協会)を訪問し、会長以下幹部の方々の大変な歓待を受けた(写真-1)。今後EAPEAと何か接点をつくれぬものかと思案している次第である。

その他、ヤンゴンの日本大使館には大変お世話になり、ミャンマー国会の議事録に関する情報、国会審議のテレビ中継の現状、そして地元テレビ局の訪問等、所期の目的を十分に果たすことができた。

今回のヤンゴン行きの目的の一つに、まことに個人的な関心事ではあるが、ヤンゴン市内の環状線にぜひ乗ってみたいというものがあった。ヤンゴン市内38駅、一周すると46km程度の、日本でいう山手線のようなものである。と言っても「月とスッポン」の違いがある。線路・路盤の整備・メンテナンスが非常に悪いため、揺れる、揺れる、その揺れ方は尋常ではない。そのためスピードも出せず、自転車よりやや速いというところか。

車内での物売りも入れかわり立ちかわり、街なかの市場を車両の中にギョッと押し込めたような感じ。窓も開けばなし、閉まらないのかもしれない。ドアも開けばなし。年中暑い土地柄、これで支障はないのだろう。クーラーのついている車両もあるらしいが、別料金とのこと。まあ、のどかといえばのどか。駅も、駅舎らしきものはどの駅にもほとんどなく、ホームは近所のおばさんや子供たちの昼寝の場所になっていた。揺られ揺られて一回り3時間程度。

環状線ではない普通の鉄道は、数十年前の日本のローカル線と見間違えるような感じ。日本から持ち込まれた中古車両がそのままの形で走っている。車内の内装もそのまま。行く先表示のミャンマー語は当然読めないが、その後ろ(かげ)には「久留里線」という文字が読める。JR東日本からの中古車両のようだ。こんな車両を見ると何かほっとする。

ヤンゴンの道路の渋滞はすさまじい。悪い道路事情に比べ、車が余りにも多過ぎるのが原因。しかもその車のほとんどが日本の中古車。そしてまたそのほとんどがトヨタの中古。まあ、この中古車の氾濫には、この国の持ついろいろな事情があるのだが……。

車が日本とは逆の右側通行の道路に右ハンドルの車があふれている。何とも不思議な光景だ。バスも右ハンドルの中古車が多い。必然的に乗り降りのドアは進行左側になる。つまり、バス停では追い越しの車がどんどん通る側に乗降客が乗り降りすることになる。日本ではちょっと信じられない。これにはヤンゴン式の涙ぐましい工夫・対応策をとっているのだが、紙面の都合で割愛する。ただ、ある程度目につく韓国製の中古バスの場合、左ハンドルなのでこの問題は起きない。

市内南西部にはヤンゴン川に架かる橋がない。川幅は1.3km程度か。日本人から見れば大河だ。対岸のいわゆる低所得者が多く居住する地区との行き来には数人乗りの小さな渡し船が唯一の交通手段だったが、悪天候の時の転覆事故が絶えなかったという。それを2014年に日本の援助で新造フェリーが3隻贈られ、接岸のための棧橋とターミナルビルも無償でつくられた(写真-2)。その結果、そこでの水難事故は皆無になったとのことである。フェリー船内には、日本に対する感謝のプレートが掲げられており、日本人のみ乗船料は無料。わずかな金額ではあるが、日本に対する感謝のしるしのこと。所要時間は片道6,7分、無料で対岸との往復をしたが、何か面映ゆい感なきにしも非ずであった。

3月中旬に民間人の大統領も決まり、軍政から民政に大きく舵を切ろうとしているミャンマー。市民の期待は想像以上に大きいものを感じた。ただその陰に、わずかではあるが軍の動きへの懸念もうかがい見られた。軍政時代に受けた傷あとが意外と大きいのも確かなようだ。獄につながれ戻ってこられなかった人、戻ってこられても、障がい者に近い状態になってしまった人等の話も洩れ聞こえてきた。

市内のレストランに行くと、極端に言うとも客よりも給仕の人の方が多い。それも圧倒的に若者。ある現地在住の日本人は「日本人一人分の仕事を現地人3,4人でやっている。それでも人件費が安いから採算がとれるのだろう」と言っていた。

最低賃金は日本円にして350円程度と聞いた。「350円?日本では時給900円前後だけど、ヤンゴンでそんなにもらえるの?」と聞き返したところ、350円というのは1日の最低賃金とのことであった。時給にすれば50円くらいか。

このように廉価な労働力そして若者が多く、今後の発展への可能性に満ちあふれているミャンマー。その中心地ヤンゴンを歩き回って、なぜかかつての日本の息吹を感じた次第だ。また、ミャンマーのために日本が少なからず役立っているのを見聞きして、閉塞感充満の日本から1週間ほどの脱出ではあったが、何かほっと一息つけたような感じがした。(3月20日記)

(当アカデミー理事)



MAJAの方々(中央が筆者、その向かって右の女性が会長)



寄贈されたフェリーと棧橋

## 会員からの便り②

## 韓国での弥次喜多道中顛末記 1508

SPM 研究所代表 佐々木憲文

昨年 8 月、日本と韓国の友人たちと韓国慶尚南道の昌原、巨済島、海金剛、怡島（冬ソナで有名な島とのこと）に旅行しました。韓国でマッコリ作りを通して知り合った福岡の友人、園田高明氏と韓国の田舎へ一緒に日程調整をして訪韓しました。旧友・梁竣永氏と江華島へ行こうと計画していたところ、ソウル在住の宮嶋博史夫妻から、夫人の弟さん家族が住む昌原へいっしょにと誘われ、急遽変更した旅でした。園田氏は九大の燃料電池の研究者で、現在は万華鏡伝道師と称し、障害者や高齢者に笑顔を！をモットーに世界各国を飛び回っている活動家です（東日本の被災地も頻りに訪問しています）。理工系らしく、訪れる地域の歴史や地理も事前に調査研究して旅程も詳細に計画します。園田氏は、突然の予定変更に驚くと同時に、旅のすべてを相手任せの私に呆れかえりつつ、大きな不安と淡い期待とを抱いての出立でした。

旅は何れともあれビールとつまみ、とその点は準備万端の私ですが、韓国では車中ではあまり飲まないとか。白い目を気にしつつも旅情を味わうために不可欠の「ピシュー」の音と小さく乾杯の唱和をして出発。田園風景に見入りながら快い酔いに身を任せての約 3 時間で昌原到着。駅頭まで花束をもって迎えに来ていただいた弟さんの案内で、経営される食堂へ。独自に研究されたアナゴ焼きなどをご馳走になりながら、智異山で採った葉草の入った酒で乾杯を繰り返しながらの昼食ですっかり酩酊です。もうすぐ夕食だから暫く休んでいたら案内されたのがカラオケ店。

本当は東京大学歌謡大学院教授だったのでしょうか？といつも感嘆する宮嶋氏（元・東大東洋文化研究所）、氏から毎日通っているのではと揶揄される夫人（美空ひばりの「川の流れるように」は本人以上です）は、新旧織り交ぜての持ち歌で陶醉させてくれます。梁竣永氏は教会聖歌隊の元リーダーで、作詞家のお嬢さんの歌を朗々と唄います。巧みな歌唱力で拍手を得る三人に対し、酔いに任せて大声で叫び、そのうささに機械は評価を放棄し高得点を出し、「故障だ」と宮嶋氏は機械を叩き、ようやく終わってくれた！と絶大な拍手をうける私。私の歌で高得点ならと古過ぎる歌で挑戦する園田氏には、懐かしさに感動しての拍手が送られていました。休むどころかすっかり若やいで楽しむうちに、夕食だからのお迎え。

夕食の海鮮鍋は、さすがに海辺で魚介類や海藻類がいっぱい入り、新鮮で滋味深く美味でした。珍しい料理の数々に目を見張る園田氏は、宮嶋氏夫人の姪の熙善氏に説明を受け世話を焼いてもらって大感激。醒めやらぬ酔いにさらに追い酒の杯を重ねての宴は、いやがおうにも盛り上がり、いつしか夜が更けていきました。

翌早朝に出発し、巨済島のドライブインで朝食。見るだけで感激する私にとって、窓の外に広がる青い海は何よりのご馳走。食事もそこそこにベランダに出てひたすら眺めました。山間を縫い、南の船着き場まで約 1 時間。船は出航したばかりで 1 時間の待合わせ。しかし 6 人での楽しい語りいで瞬間に消化でき、いよいよ乗船。幼い頃、マドロスパイプをふかす船乗りになりたかった（早熟でした）のですが、すぐに船酔いする体質で諦めた記憶が蘇ります。窓際に席を占めたものの、波立つ海に魅せられ外のデッキに立ちづめでした。

さすがに海金剛（海の金剛山）と呼ばれるだけあり、美しさは喩えようありません（写真）。綺麗な水面に映える姿は、韓国の美を理解するための素晴らしい教材です。船は 20 分ほど行きつ戻りつ海金剛を回りながら観光案内をしてから怡島へ。島はかなりの人で賑わっていました。個人の所有で、綺麗に整備されていました。観光客で賑わうようになったのは、「冬のソナタ」以降との話でしたが、風光明媚でリゾート地としてもすぐれた場所と思われず。

冬ソナの大ファンらしく、その最後のシーンの場所だと熱心に説明してくれる園田氏を「意外にミーハーですね」とからかうと、「いや、あれは名作です！」と憤然とし、老いの身を勞わりつつ休み休みしかも関心なさそうに巡る私たち（熙善氏だけが若い）を置き去りに、熱心に余すところなく回っていました。

巨済島に戻り、鯛の生き作りの遅い昼食兼早い夕食で腹ごしらえ。陽があるからと躊躇していた友人すべてが、焼酎の杯を重ねる速度も速くなり、海の照り返しで日焼けをしたと言いつつ、いい色に染まってきました。駅までの車中はみんな居眠り。辛うじて間に合った KTS で一路ソウルへ。トイレへ行く暇を惜しんで準備したビールとつまみは、梁さんと私だけが楽しただけでした。一人では決して飲まない酒ですが、友人たちと旅をしながらだと、いくらでも入っていくようです。親密度はいよいよ増し、次の計画を語るうちにソウル到着で旅行は終わり。呆れかえって冷眼を向けていたことを忘れ、「こんな楽しい旅は初めて」と手を握りしめて感謝してくれた園田氏が、旅の楽しさを証明してくれました。日韓それぞれ 3 人ずつ、人数は多かったのですが、まさに弥次喜多道中でした。

(当アカデミー監事)





## 会員の活動

### 活動内容と展示会スケジュール

韓国光州市立美術館名誉館長・秀林文化財団理事長 河正雄

今年の上半期活動内容と行事日程を御案内申し上げます。

- |             |  |
|-------------|--|
| 2月2日～6月5日   | 韓国光州市立美術館主催<br>河正雄コレクション河合勝三郎「生の痕跡」展開催   |
| 2月18日～5月29日 | 韓国大田市立美術館主催<br>河正雄コレクション全国巡回大田「静謐なる響き」展開催  |
| 2月25日～3月25日 | 秋田県仙北市立田沢湖図書館主催<br>河正雄コレクション呉日「きらら」絵画展開催   |
| 2月26日       | 秋田県仙北市教育委員会主催<br>仙北市立角館中学校全校生に「私の先生と友」<br>講演会開催  |
| 3月13日       | 千葉県館山市 NPO 法人安房文化遺産フォーラム主催<br>船田正廣作「刻画・海の幸（原画：青木繁）」<br>ブロンズレリーフ除幕式及び講演会                          |
| 4月6日～10月2日  | 韓国全羅南道霊岩郡立河正雄美術館主催<br>河正雄コレクション「霊岩アリラン・李鎬信展」開催   |
| 5月9日～8月20日  | 韓国ソウル市秀林文化財団主催<br>金熙秀記念秀林アートセンター開館記念<br>河正雄コレクション「崔承喜写真展」「朴炳熙彫刻展」<br>「金容旭写真展」<br>河正雄アートギャラリーにて開催 |
| 6月25日～6月27日 | 秀林文化財団主催<br>山梨県北杜市にて第13回清里銀河塾開催<br>(当アカデミー理事)  |

### 若松兎三郎遺跡地訪問記

高須俊明 日本大学医学部名誉教授

木浦ツアーは晴天に恵まれ山と海の色合いを堪能することができ、旧日本領事館の赤レンガも殊のほか美しく見えました。陸地綿記念碑と綿畑をひとまとめにして観光できるようにする夢に実現性があるのは嬉しいことです。

百聞は一見に如かず、開港前の木浦が日中海路の中継地として栄えた跡を海洋博物館にて見知り、開港以後の数十年の発展を旧日本領事館や歴史館で認識し、韓国の5指のうちに数えられる都市の一つであって優秀な人材を育んだ土地柄であり、名門学校を有していた史実を知りました。戦後の飛躍的發展を埋立地に建設された眼前の新市街や林立するホテル、アパート等の建築物、高下島へ到る海上大橋、整備された品揃えを誇る大スーパーマーケット、よくできた博物館群や金大中ノーベル平和賞記念館、道路、道路を走る多数の内装外装ともにきれいな韓国車などに伺い知ることができました。

若松兎三郎が朝鮮に残した事績を機縁にして両国民の交流が深まり広まることを第3世代遺族の一人として願っています。そのために私も、今後も微力を尽くしたいと思います。

(若松兎三郎の孫)

#### ■編集後記

2016年に入ってから世界情勢は混迷を極めていますが、韓国でも与党敗北、北朝鮮の不安定化など、私たちの近辺でも物騒な状況が続出し、世界全体がどの方向に行くのか、誰も分からなくなってきました。そのような中で、今回の号では、軍政からやっと解放されて発展し始めたミャンマーの明るい雰囲気伝えるルポと古き良き時代を象徴するような韓国での厚い友人関係を描いたエッセイを特集しました。一瞬、混迷し閉塞感漂う社会にいることを忘れさせてくれるほどの素晴らしいお話で、感動した次第です。

また永野代表の縦横無尽な活躍ぶりは相変わらずで驚くばかりですが、それに引き換え若い人たちの内向き志向はどしたらよいのかと思案するばかりです。いずれにせよ、ご多用中にもかかわらず、御玉稿をお寄せ下さった皆様には厚くお礼申し上げます。(大杉由香)



旧木浦領事館前にて